

投稿

森本おじさん さようなら

森本さん安らかに

黒田武彦（西はりま天文台公園）

11月16日朝9時前に携帯の電話が鳴った。電話の主は鹿児島県在住の知人だった。「森本先生が亡くなられたんです」と泣き声である。耳を疑った。8時半に死亡が確認されたという。つい先日も元気に話し合ったばかり、相談もなく逝ってしまうなんておかしい、と何かしら現実と虚構が入り混じった変な気分が陥ってしまった。

森本さんは鹿児島大学在勤中に日本フィルハーモニー鹿児島実行委員長となり、退職後も続けておられた。15日はそのプレコンサートの日で、大成功に気を良くされ、大いに宴が盛り上がったという。その翌朝の突然の死である。急性心筋梗塞だった。

森本さんとの出会いはずいぶん古い。私が大阪市立電気科学館に在職中、職場の仕事だけでは飽き足らず、大阪天文学研究会という少しアカデミックな会を立ち上げ、大阪教育大学の横尾さんなどの協力も得て活動を展開し始めた。科学館という職場に籍を置いている性か、一般市民向けの天文講演会も研究会で企画した。肝心の科学館では思うような仕事は何もできない。有料でも良い企画をすれば市民を呼べると思ったのである。第1回目が宮本正太郎さんで、2回目が森本雅樹さんをお願いすることにした。テレビでも活躍中だった頃で、東京からの旅費込みで4万円、こんな額で来ていただけるだろうか、と恐る恐る手紙を書いた。するとすぐに返事が来て「NHKのような薄謝のところへでも喜んで行きます！」と。この時の森本さんからの教訓は、天文学はまだマイナーな分野、依頼があれば当然、依頼がなくても売り込むく

らいの意気込みが必要ということだった。

ともあれ1977年9月17日、大阪府立私学教育会館での講演会は強烈なインパクトがあった。「電波で見る宇宙像」、舞台の上を動き回り、聴衆に語りかけ、笑いを誘い、質問を誘導する手口？は誰にも真似られるものではなかった。私が聴いた森本さんの講演で、起承転結のしっかりとした「天文学」らしい内容は、この時が最初で最後だった（森本さんごめんなさい）。終了後の懇親会も脳裏に焼き付いている。踊り付きの「荒城の月が出た出た」。ご存じの方もいるだろう。以来、33年の長きにわたる深いお付き合いが始まったのである。

三鷹の天文台官舎に伺ったり、野辺山の踏切横の借家や官舎に伺ったときの料理も忘れられない。当時の森本さんは「これは料理じゃないよ、食事なんだよ」が口癖だったが、鰯を買ってきて自らつみれを作ったり、ウドのてんぷらに挑戦したり、新鮮な鶏のささみを湯引きし、刻んだ大葉と柚子皮をくるんでわさび醤油で・・・等々、すべてが絶品だった。東京在住の頃は日本酒がお好きだったと記憶しているが、野辺山に移られてからは山梨の白ワインが中心になった。冷凍室で冷やしたメノウを片口に入れ、そこへ白ワインを注ぎこんで、一石二鳥、メノウの彩の美しさを愛でているうちにワインも適度に冷えるのである。野辺山での森本亭のもてなしの一つであった。この白ワインの飲み方は1998年に私の住居の近くに引っ越してこられ、亡くなるまでの間も変わらなかった。最後まで使っておられた片口を私は形見でいただくことにした。

そもそも森本さんに西はりま天文台公園の

園長として来ていただくということになったのは、国立天文台ご定年の前、東京の毎日新聞本社近くの喫茶店でのことだった。「就職先が無くて困ってる～、黒田さん雇ってくれない?」。「本当ですかあ?」森本さんが就職に困るわけがない。全く信用のおけない話だと思ったが、「話を進めていいんですね」と念押しすると「もちろん」との返事。願ってもない話なので、さっそく兵庫県の所管部署に連絡、話はとんとん拍子で進み、兵庫県最高幹部の一人と野辺山の官舎を訪れ決定したのである。1993年4月、西はりま天文台公園長就任。ところが……。

すんなりというのは森本さんには似合わないと思ったら、やはりそうだった。お呼びがかかった山梨大学学長を蹴った?までは良かったが、鹿児島大学教授を引き受けてしまったのだ。これには伏線があった。私が見落としていたのだ。日本物理学会の機関誌に「60歳くらいの電波天文学者を求む」という募集要項が掲載されていたのである。森本さんをターゲットにした募集要項そのもの、森本さんは何事もなかったように鹿児島大学に赴任し、一人私は善後策に東奔西走することになった。何とか着地点が見つかった。1週間に2日間は西はりま天文台公園へ来ていただくことであった（実際には月に2回程度で、宿泊してもらうために天文台公園のある佐用町に私と共同で家を借りていたことがある）。そんな森本さんの生活が5年続いて、やっと天文台公園で腰を落ち着けて……と思ったら、兵庫県がさらに格上の施設、南但馬自然学校といういわば林間学校の校長を兼任させてしまったのである。

じっくりと時間をかけて天文台公園の管理運営に取り組んでいただこうと思ったが、とても無理な相談だった。でも常に森本さんは走りながら、いろんなアイデアを投げかけたり指導や援助を下さっていたような気がする。

特に私が大型望遠鏡を計画していることを知ると、電波望遠鏡を通じて懇意になったメーカーの幹部をご紹介下さったり、直接メーカーまでお連れいただいたこともあった。「こんにちは、あのね……で、どんどん出かけないといけないよ。野辺山もそうやって作ったんだ。」と盛んに言われていたことを思い出す。要所要所で大きな力になってもらったことを今更ではあるが感謝している。

森本さんが一番やりたかったのは、全国津々浦々に天文学が学べる大学をつくることであつたような気がする。西はりま天文台公園園長をお願いする前から、兵庫県立姫路工業大学を私と訪問して、学長に「こんにちは、あのね……」作戦を展開したのである。理学部の中に宇宙天文コースをつくろうと、講義科目案までできあがった時期に、あの阪神淡路大震災が起きた。計画は頓挫してしまった。

森本さんの兵庫に天文が学べる大学を……は終わったわけではなかった。鹿児島大学の成功例をひっさげ、学長が変わろうとも「こんにちは、あのね」は続いていた。そして3つの県立大学が統合して、兵庫県立大学が発足した2004年、県立大学自然・環境科学研究所の中に宇宙天文系を設置することになり、西はりま天文台公園に研究所が附置された。でも森本さんは不満だった。学生や大学院生を直接指導するシステムではなかったからである。

最近、学術研究を目的にした大学や大学院を目指すという方向から、天文学や自然史を中心にした高度なサイエンスコミュニケーションの習得を目指す方向へと目的を移したプランを森本さんに提示をし、賛意を得たばかりだった。優れた科学館学芸員、科学ジャーナリスト、理科教員等の輩出を夢見て計画を具体化していこうとした矢先だった。森本さんの新しいことを自らの力で、楽しく実現するという思想をもう少し学ばせてほしかった。

最後に、森本さんのすばらしい発想と成功例を紹介しておこう。サイエンスツアー「ひょうごは大きな博物館」である。私達は兵庫県が計画をしていた子ども科学館構想に携わった。結局、実現はしなかったが、その過程でもう箱モノは不要だということになった。もちろん声を出したのは森本さんだった。バス1台あれば良いという提案に、構想委員は度肝を抜かれた恰好だったが、百聞は一見にしかず、実践をして良さを感じ取ってもらおうということになった。要は、兵庫県全体が博物館、1泊を基本とし、実地体験をしようというもの。その際、可能な限り現地の専門家に説明等を願い、夜は交流を兼ねて翌日の勉強会、というものだった。1998年に開始し、昨年で25回を数えた。参加者も関東から九州にまで広がり、毎回30名前後で催行した。そろそろ次の企画をしないと間が空きすぎたね、と話し合っていたところである。森本さんのツアーコンダクターになりたいという希望と、何にでも首を突っ込んでみようという好奇心の塊が、サイエンスツアーをとて面白いものにした。もちろん実施前はかなり綿密な下見を行うことは忘れなかった。森本さんと二人三脚で続けたサイエンスツアー、もっと続けたかったが、最高の相棒はもういない。

33年間のお付き合いで、モノの見方、考え方だけでなく、人との接し方、料理のコツ、酒の飲み方を含めありとあらゆることを体験し、学ばせてもらった。でもよく考えてみると、一つだけ森本さんから学んでいないことがあった。天文学である。

森本さんありがとう。もうちょっと「おじさん」でいてほしかったけど、森本さんは人の何倍も仕事をし、人生を楽しんできたから、これで良かったのかもしれない。ほんとうにありがとうございました。



マダガスカル日食成功で満足の森本さん
(左、右端が黒田)



在りし日の森本さん

森本さんを追悼する

松村雅文(香川大学、前天文教育普及研究会会長)

森本さんとは、私は直接の学問的な繋がりはありませんでしたが、森本さんの猛烈なパワーは、色々な人から、色々な話(神話?)を聞いていました。その話の多くは天文の関係者からだったのですが、天文と関係のない人(複数)からも、大学の教養の天文の授業が楽しかったとか、非常勤の授業に来られて、夜の懇親会がたいへん盛り上がったといった話を聞いて、驚いたことがありました。

このような私ですが、一度だけ、森本さんのお役に立てたことがありました。昨年、世界天文年の日本委員会の会議が終了した後、

森本さんと黒田武彦さんと私の3人で食事をしました。このとき森本さんは、「日本の中で今までに講演をしていない県が二つあり、その一つが徳島県なんだけれど、講演のオーディションをお願いできる科学館はないかな」と話されました。偶然にも、私は非常勤で“あすたむらんど徳島子ども科学館”のプラネタリウムアドバイザーということでこの館に出入りしていました。そこで、後日、館のプラネタリウムの中橋弥里さんに相談し、オーディションどころか、こちらからお願いして講演に来ていただくことになりました。

そして2010年9月12日に、特別講演会「森本おじさんと宇宙を作ろう！」が行われました。前夜の“パーティ”に、私は参加できませんでしたが、館のプラネタリウムのメンバーと、大変、盛り上がったと聞いています。

当日の講演会も、独特の口調で、たのしく宇宙を紹介されました。聴衆の皆さんにとってはもちろん、館のメンバーにとっても貴重な経験になったと思います。ありがたいことに、この時の講演会の様子は、「森本おじさん」のホームページに、森本さんご自身によって掲載されました。



このようにお元気な様子だったのに、2ヵ月後の11月に、訃報に接し、本当に驚きました。ご冥福をお祈り致します。

遥かにみおくる…森本雅樹先生

～「オトシゴロですから・・・」～

小野夏子☆（板橋区立教育科学館）

訃報

訃報は、いつも突然です。それが、ご高齢の方であっても。

森本先生が亡くなったのを知ったのは、インターネット。Twitter・・・今、流行の「つぶやき」を配信するもので、「ショート・ブログ」などと称されることもあるシステムだ。

2010年11月16日

その日、帰宅した私の Twitter 画面には、「はやぶさ」関連の話題に交じって、森本先生に関する不穏なつぶやきが散見された。「え?」「まさか?」確実な情報が欲しくて Web 検索をかける。「ニュースのサイトを見れば・・・」しかし、なかなか見つからない。ようやくどりついたのは、鹿児島のテレビ局のニュースだった。「何故、鹿児島?」

後に、伺った話では、最後の最後までお元気だったご様子。それなら、良かった。脳裏に、森本先生の元気な笑顔が蘇る。元気でなかったら森本先生らしくない。

オトシゴロ

森本先生との思い出は、いろいろある。母を亡くし気落ちしていた私に森本先生は声をかけて下さった。

「オトシゴロですから...」

これは「夏子さんも親御さんを亡くされるような歳なのですね」ということなのだろう。

今、森本先生の訃報に際し、森本先生から頂いた言葉を今度は私からお贈りしたい。

「森本先生もオトシゴロですから...」と。

エロダンディだった森本おぢさん

福江 純（大阪教育大学）

業界に入ってから以来、名著『電波天文学』や一般の啓蒙書その他で、偉い電波天文学者だというのは知っていた。が、想像“できる”以上にエライせんせいだとわかったのは、うちの研究室が全面的に協力した、日本天文学会1988年春季年会の際だ。右手でうちの女の子のスカートを捲りながら、左手で呑み会の勘定書を攫っていく、エロダンディなオヂサンだった。当時、あの歳になれば、あんなことやこんなことをしてもいいんだと、密かに決意したけど、ほぼあの歳になったものの、森本峰はまだまだ高い。



図1 毎日受付（女の子のそば）にいた
（近畿大学にて：1988年5月17日）



図2 似たものカルテット？（オヂサンの古希
パーティで：2002年5月12日）



図3 コラコラ、人の嫁をお持ち帰らないように（黒田さんの還暦パーティで：2006年11月5日）



図4 2012年を約束したのに（ふじ丸の日食
同窓会ツアーで：2010年5月29日）

ファーストコンタクト以来、なぜかいつも「じゅんちゃあ〜ん」と叫びながら駆け寄ってきて抱きついてくれる人だった（笑）。呑み友だちならともかく、抱き友だちはあまり聞かないなあ（若干もう1名いるけど）。でもそれも、今年の5月に2012年の日食を約束して抱き合ったのが最後になった。人生が少しつまんなくなった感じだ。改めて、めざせ、オヂサンイズム。

参考サイト

<http://quasar.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/~fukue/>